

東雲夢通信

東雲中学校校長室通信

文責 校長 渡邊 和彦

平成三十年十二月十一日発行第十四号

しめ縄は何を繋ぐか



今年もしめ縄の掛け替え行事が行われました。そして、今年には50回目の記念です。本校が授業日として、この行事に参加するようになったのは三年前。従って、現三年生は毎年

参加してきましたことになりました。私は今年、このしめ縄の掛け替えで、いろんな事に気づきました。世代や時空や場所を超えた繋がりで、

さくらさんや侑来さん、碧君や卒業した結さんのおじいさんやおばあさんがいます。そしてお母さんやお父さんもいます。みんなが当たり前のように、藁をわいたり、まとめたり掃いたり、

運んだり結つたりしています。地域を越えた繋がりがありません。大浜の方、蒲戸の方、福泊の方に夏井、長田の方々、津井の方、浅海井の方、浪太の方々がいます。佐伯の方も萩町の方も、海外の方もいます。肌の白い人も黒い人もいます。

立場の違う人がいます。市長さんも、警察官の人、新聞記者の人、小学生も、先生も：みんなが何かを願い、何かを祈り、当たり前のように、小さな藁を巨大な縄へと紡いでいきます。怒った顔の人、ふてくされた機嫌の悪い人はどこにもいません。

僕はこの日、何度もいろんな出会い直しをしました。小学生の時、野球の監督をしてくれた富高さんに会いました。最初、ぼぼ目しか見えていない、毛糸の帽子をかぶっていらつしやつたので、気づかなかつただけで：「まっこさん」と愛称で呼ばれていた富高さんは、僕らの憧れでした。夏休み練習に行くときに、富高さんの家に迎えに行くのが楽しみで仕方なかった。

富高さんや、亡くなられた高槻さんのお陰で、僕は野球少年になれました。そして、ここでこうして愛すべき生徒達と、しめ縄に触れることができている。

いつも和服をばっちり決めて素敵な花柳綾沢先生も今日は首からハサミをぶら下げ、作業にあたっておられます。

小学生だった僕たちに、すごく速い

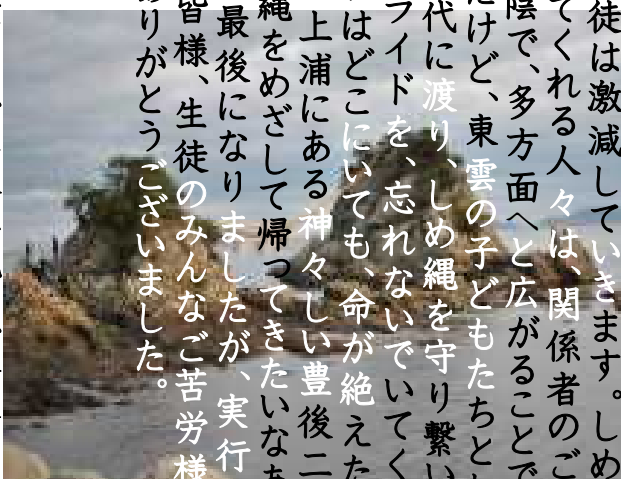
ボールをバッティング投手として投げてくれた、浅海井区長の松田さんは、縄を束ねるときに、皆さんに指示を出しています。なんだか不思議な感覚に襲われます。

五十年前、僕は五歳で、上浦幼稚園に入園する直前。あの頃、田の森崎さんも、剣道の松田さんも、すみれさんのおじいちゃん、吉岡さんも、大浜さんも松村さんも、最後の上浦町長、中村さんも青年だった。そして、五十年後の今も、お子さんやお孫さんと共に、しめ縄に携わり続けているのです。

おじいちゃんは号令を出し、娘さんは這いつくばって藁を集め、お孫さんは巫女としてお守りを売っています。奇跡のような光景です。

生徒は激減していきます。しめ縄を支えてくれる人々は、関係者のご尽力のお陰で、多方面へと広がることでしよう。だけど、東雲の子どもたちとして、三世代に渡り、しめ縄を守り繋いできたプライドを、忘れないでください。私はどこにいても、命が絶えたとしめ縄をめざして帰ってきたいなあ。

※最後にになりましたが、実行委員会の皆様、生徒のみんなのご苦勞様でした。ありがとうございます。



上浦よ、豊後二見よ、永遠に！